分析2 モバイルのさらなる発展の土台となるか？

SIMフリー後の世界

SIMロックフリー後、モバイルの世界はどうなるのか？　キャリア、端末ベンダー、ユーザーそれぞれの視点からそのインパクトを分析するとともに、求められる事業構造を提言する。

文◎**松岡良和**（アーサー・D・リトル・ジャパン）

4月に入り、総務省はモバイルキャリア各社へSIMロック解除の要請を行った。

端末選択の自由度向上や端末価格の上昇に対する懸念といった“近視眼的”な功罪が話題に上っているが、SIMロック解除の本質的な意味合いは、モバイルビジネスの更なる高度化に向けた制約条件の撤廃という役割にある。

SIMロックが果たしてきた役割

日本のモバイル市場は、端末と広義のネットワークサービスが完全にバンドルされることで発展し、現在の加入者数水準、サービス水準を築き上げてきた。

販売奨励金制度に基づいてユーザーに対して安価な端末を提供する代わりに、加入・長期利用を促すとともに、モバイルキャリア自身も提供サービスの高度化に研鑽することで、社会における携帯電話の役割や位置付けを比類ないものへと育成させることに成功した。

携帯電話が現在の地位を獲得し、あらゆる生活シーンに浸透していくうえで、SIMがロックされていたことの意味合いは非常に大きいと言える。SIMロックは、モバイルキャリアが利用端末を拘束するという側面よりも、ユーザーに対してさらなる利便性向上を約束するための手立てという側面のほうが大きかったからだ。

日本市場では、SIMがロックされた状態を前提として、端末とネットワークの効果的な連携によって価値を生み出す各種のサービスが実現された。NTTドコモが生み出したiモードモデル然り、おサイフケータイ然りだ。これらのサービスを実現するうえで必須となる機能や技術は必ず端末側に反映されており、モバイルキャリア側が描く意図に従ってユーザーは端末およびサービスを利用することとなった。

モバイルキャリアが提供するサービス品質の高さは、このような背景と仕組みから生まれてきていると言っても過言ではないはずだ。ユーザーは必ずSIMロックされた端末を使ってくれるので、モバイルキャリアサイドは安心して自らの創意工夫をユーザーに投げかけることが可能になるからだ。

以上の点から少なくとも市場成長期においては、ユーザーの端末がSIMロックされていることに対してモバイルキャリアが示す“責任感”が、ユーザーおよびモバイルキャリア双方に対して確実な便益をもたらしてきたと言えよう。

SIMロックフリーの有用性

ここで、今なぜSIMロックフリーが求められているのかを、さまざまなプレイヤーの観点から述べてみたい。これまでのモバイル社会の発展を裏から支えてきたSIMロックが否定されるのには、将来を見据えた本質的な意味合いが存在する。

まずは、モバイルキャリアの視点から考えていきたい。

以前の販売奨励金の仕組みが色濃く残っていた時代では、モバイルキャリア各社はSIMロックフリーに対して明確に反対する立場を採っていた。

端末を低価格で販売し、その後長い時間をかけて通信料収入で利益を賄う構造であったため、契約直後

松岡良和（まつおか・よしかず）

経営コンサルティングファーム、アーサー・D・リトルのTIME（Telecom/IT/Media/Electronics）プラクティスの日本代表。主な担当領域は、通信、IT、金融業界における事業戦略策定、サービス／ビジネスモデル開発、組織／人事戦略策定に関するコンサルティング